

慶応義塾大学所蔵『新鐫通俗演義三国志伝』について

中川 諭

夷白堂 楊爾曾、字聖魯、號雉衡山人、又號夷白主人、
錢塘人。

とあり、さらに、

- ・海内奇觀十卷 明楊爾曾撰 明万曆三十八年夷白堂刊
- ・圖繪宗彝八卷 明楊爾曾撰 明万曆三十五年夷白堂刊
- ・高氏三宴詩集三卷香山九老詩一卷 明高氏撰 明万曆書
林夷白堂刊

慶応義塾大学附属図書館に『新鐫通俗演義三国志伝』と称する『三国志演義』の一本本が所蔵されている。全二十四卷であるが、卷一・三・十二・十三を欠いている。この本の各巻頭に「武林夷白堂刊」とあり、杭州の「夷白堂」という書肆から刊行されたものであることが分かる。(以下「夷白堂本」と略称を用いる。)さらに卷二十一の巻頭書名の下に「徽郡原板」とある。半葉九行行十七字。また本はきわめて小型であり、他の『三国志演義』諸版本や通常の明刊本の小説のおよそ半分程度の大きさである。孫楷

第『中国通俗小説書目』には著録されない。

この夷白堂本の刊行年は明確には分らない。ただ書肆夷白堂について、杜信孚『明代版刻綜録』には、

の三種の刊本を著録する。この前二者から、夷白堂は万曆三十年代後半を中心に活躍していた書肆と思われる、このことから夷白堂本『三国志演義』も、おおよそ万曆三十年後半頃の刊行と一応推測することが可能である。

この夷白堂本の存在については、上田望⁽³⁾『三国志演義』版本試探―通俗小説の流伝に関する一考察―⁽³⁾ および金文京『三国志演義の世界』⁽³⁾で紹介されている。しかしどちらの論考にも夷白堂本の具体的な特徴については触れられて

いない。そこで本稿ではこの夷白堂刊『新鵠通俗演義三国志伝』を取り上げ、他の諸版本との相互の関わり、およびそこから分かる『三国志演義』の版本の変遷におけるいくつかの問題を考察していこうとするものである。

二

ところで『三国志演義』諸本は、筆者の考えによれば、大きく三つの系統に分けることができる。すなわち、

一、二十四卷系諸本 (『三国志通俗演義』系統)

① 十一の挿入説話なし

② 十一の挿入説話あり

二、二十卷「花関索」系諸本

三、二十卷「関索」系諸本

である。このうち一の二十四卷系諸本は、毛宗崗本が成立していく過程に関わる諸本であり、いわゆる「関索説話」を含む十一の挿入説話の有無によってさらに二つのグループに分けられる。その挿入説話のないものが現存最古の版本といわれる嘉靖本であり、挿入説話のあるものが周曰校本や夏振宇本・李卓吾評本などである。毛宗崗本はこちらのグループに属する。二の二十卷「花関索」系諸本は福建の建陽で刊行された『三国志伝』のうち「花関索説話」を

持つもの、三の二十卷「関索」系諸本は『三国志伝』のうち「関索説話」を持ち、文章が他の二系統に比べて簡略になっているものである。¹¹⁾

それでは夷白堂本はこれらのどの系統に属するのであるか。

夷白堂本の本文を調べていくと、周曰校本などに見られる十一の挿入説話が確認できる (当然欠巻の部分に存在するであろうものは除く)。この十一の挿入説話は、『三国志演義』諸版本の中でも、二十四卷系諸本の周曰校本や夏振宇本などのグループに特有なものである。したがって夷白堂本は二十四卷系諸本のうち、周曰校本や夏振宇本などと同じグループに属すると考えられる。

またこのことを文章の面からも確認してみよう。二十四卷系諸本からは嘉靖本と周曰校本、二十卷「花関索」系諸本からは鄭少垣本、二十卷「関索」系諸本からは朱鼎臣本を取り上げ、夷白堂本と比較してみる。場面は、孫権は関羽父子を捕え首をはねた。その時建業から張昭がやってきた。張昭は関羽を斬った以上、劉備が蜀の国を挙げて報復に来るだろうと孫権に言った、というところである。(各版本間の違いがわかりやすいよう適宜空白をあけた。以下同じ。)

○夷白堂本卷十六「玉泉山関公顕聖」

嘉靖本	周曰校本	鄭少垣本	朱鼎臣本	夷白堂本
昭曰、「主 公勿憂。某有 一計。令西蜀 之兵不犯東吳」	昭曰、「主 公勿憂。某有 一計。令西蜀 之兵不犯東吳」	張昭曰、「主 公勿憂。昭有 一計。令蜀 兵不來、	張昭曰、「主 公勿憂。昭有 一計。令蜀 兵不來、	昭曰、「主 公勿憂。某有 一計。令西蜀 之兵不犯東吳」
荆州 如磐	使荆州 如磐	荆州安磐磐	荆州 有磐	使荆州 如磐
石之安也。」	石之安也。」	石。」	石之安。」	石之安也。」
權問「有何妙 計、可速教之。 以安家禍。」	權問「有何妙 計、可速教之。 以安家禍。」	權問「其計 如何。」	權問 其計。	
試看張昭道出 甚計來。 耶	試看張昭道出 甚計來。 耶	(改則)	(改則せず)	
竟如何。 下回便見。	竟如何。且聽 下回分解。			竟如何。且聽 下回分解。
(改則)	(改則)			(改則)

引用箇所、嘉靖本葉卷十六、周曰校本は卷八、鄭少垣本・朱鼎臣本は卷十三。引用例の嘉靖本と周曰校本の文章を比較すると、嘉靖本にはある「有何妙計、可速教之、以安家禍。試看張昭道出甚計來。」の二十一文字が周曰校本には

ない。しかしそれを除く部分はこの両者の間に語句の異同はほとんどない。一方鄭少垣本・朱鼎臣本は、嘉靖本・周曰校本の「西蜀之兵」が「蜀兵」であったり、また「不犯東吳」が「不來」であったりして、嘉靖本や周曰校本と若干文字に異同がある。また鄭少垣本と朱鼎臣本の間にも多少の文字の異同が認められる。特に朱鼎臣本は他の系統とは改則の箇所を異にしている。このようにここに引用した個所の文章はそれぞれの系統・グループによって違いがある。そこで夷白堂本の文章を見てみると、周曰校本の文章とほぼ一致している。ただ周曰校本の「主公」が夷白堂本では「王公」になっているが、これは単なる夷白堂本の文字の誤りであろう。すなわち文章の面からも、夷白堂本は周曰校本と同じグループに属することが確認できるのである。

三

夷白堂本は周曰校本と同じ二十四巻系諸本の内十一の挿入説話を持つグループに属することが確認できたのであるが、ではそのグループの中でどのように位置づけることができるのであろうか。この点を考えるために、夷白堂本の文章と周曰校本・夏振宇本・呉観明本とを比較し、その違

いを検討してみることにする。

まず最初の例。場面は、冀州の袁紹が病死した後、その後を審配・逢紀の計らいで袁紹の元にいた次男の袁尚が継いだ。一方青州にいた長男の袁譚は袁尚が袁紹の後継者となることを恐れ、郭図に様子を見に行かせた。郭図は冀州で袁尚に会い、袁譚の軍中には軍師がいないので、審配か逢紀のどちらかひとりを青州に連れていきたいと申し出る。

○夷白堂本巻七「袁譚袁尚争冀州」

周曰校本	夏振宇本	呉観明本	夷白堂本
尚懿一入内一人去、 二人都推却。尚教 拈鬪、拈着逢紀。 尚教遂紀就鬪印信	尚懿一入内一人去、 二人都推却。尚教 拈鬪、拈着逢紀。 尚教遂紀就鬪印信	尚懿三入内一人去、 二人都推却。尚教 拈鬪、拈着逢紀。 就鬪印信	尚懿一入内一人去、 二人都推却。尚教 拈鬪、拈着逢紀。 尚教遂紀就鬪印信
一同郭圖赴軍中相 勸。紀隨圖出城	一同郭圖赴軍中相 勸。紀隨圖出城	一同郭圖赴軍中相 勸。紀隨圖出城	一同郭圖赴軍中相 勸。紀隨圖出城
見譚無病、心中不 安、納上印綬。譚	見譚無病、心中不 安、納上印綬。譚	見譚無病、心中不 安、納上印綬。譚	見譚無病、心中不 安、納上印綬。譚
間動靜。紀言「袁			間動靜。紀言「袁

將軍在遺言令袁顛 甫為主、加主公車 騎將軍。今上印 綬。一譚大怒、 欲斬逢紀。郭圖諫 曰「此父命、不可 違也。」遂免之。	譚大怒、 欲斬逢紀。郭圖諫 曰「此父命、不可 違也。」遂免之。	譚大怒、 欲斬逢紀。郭圖諫 曰「此父命、不可 違也。」遂免之。	將軍在遺言令袁顛 甫為主、加主公車 騎將軍。今上印 綬。一譚大怒、 欲斬逢紀。郭圖諫 曰「此父命、不可 違也。」遂免之。
--	--	--	--

周曰校本・夏振宇本は巻四、呉観明本は第三十二回。ここに引用した箇所について周曰校本と夏振宇本の記述を比べてみると、周曰校本に見られる「譚問動靜、紀言袁將軍在遺言令袁顛甫為主、加主公車騎將軍。今上印綬。」の二十九文字が、夏振宇本にはない。夏振宇本のように、逢紀を通じて差し出された袁尚からの印綬を見て袁譚が怒るといふ記述で文意が通じなくはない。しかし周曰校本のように、袁尚を袁紹の跡継ぎとし、袁譚を車騎將軍に任じるという逢紀の言上を聞いて袁譚が怒るといふ記述の方が、よりわかりやすい表現ではないだろうか。しかも夏振宇本に見られない二十九文字は、二度現れる「上印綬譚」の四文字に挟まれた部分であり、同じ四文字を混同して生じた脱落であるろう。したがって周曰校本の方が本来の形であり、脱落を生じて夏振宇本のような形になったに相違あるまい。そし

て呉観明本は脱落のある夏振宇本の形を踏襲している。そこで夷白堂本の文章を見てみると、周曰校本の文章に一致しており、夏振宇本や呉観明本のような脱落はない。このことから夷白堂本の文章は周曰校本に近いと考えられる。

もう一つ別の例を挙げてみよう。場面は、関羽・張飛を殺された劉備は二人の弟の仇を討とうと蜀の国を挙げて呉を攻めようとしていた。その知らせを聞いた孫権は、和睦の使者として諸葛孔明の妹兄諸葛瑾を劉備のもとに派遣した。

○夷白堂本 卷十七 「吳臣趙咨說曹丕」

嘉靖本	却説、張昭入 見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故推作使而去、必降玄德矣。」	周曰校本	却説、張昭入 見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故推作使而去、必降玄德矣。」	夏振宇本	却説、張昭入 見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故推作使而去、必降玄德矣。」	呉観明本	却説、張昭入 見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故推作使而去、必降玄德矣。」	夷白堂本	却説、張昭入 見孫權曰「諸葛子瑜知蜀兵勢大、故推作使而去、必降玄德矣。」
有	有	有	有	有	有	有	有	有	

子瑜不負於孤	子瑜不負於孤	子瑜不負於孤	子瑜不負於孤	子瑜不負於孤
孤不負於子瑜	孤不負於子瑜	孤不負於子瑜	孤不負於子瑜	孤不負於子瑜
也。昔日、子瑜在柴桑時、孔明來與、孤	也。昔日、子瑜在柴桑時、孔明來與、孤	也。昔日、子瑜在柴桑時、孔明來與、孤	也。昔日、子瑜在柴桑時、孔明來與、孤	也。昔日、子瑜在柴桑時、孔明來與、孤
語子瑜曰：	語子瑜曰：	語子瑜曰：	語子瑜曰：	與子瑜曰：

周曰校本・夏振宇本は卷七、呉観明本は八十二回。この例は、嘉靖本では誤りのない文章になっているが、周曰校本では脱落が生じて読めなくなっており、そしてその後の版本では脱落を修訂して話のつじつまを合わせているのであった。そこで夷白堂本の該当箇所を見ると、周曰校本の文章とはほぼ同じで、その文章中に脱落が見られ読めなくなっている。すなわちこの例からも、夷白堂本の文章は周曰校本の文章に非常に近いと言える。

以上の二例に見られるとおり、夷白堂本の文章は周曰校本の文章に非常に近い。そしてそれは夷白堂本全体にわたって指摘できることである。よって夷白堂本は、二十四卷系諸本の内十一の挿入説話を持つグループの中でも、特に周曰校本と極めて密接な関係にあると言える。

ところが中にはわずかながら次のような例も指摘でき

る。場面は、劉備軍と曹操軍が漢中の争奪戦を繰り広げている中で、曹操軍の大將張郃が葭萌関を攻めてきた。葭萌関を守る劉備方の大將は孟達と霍峻。霍峻は関所を出て張郃と戦ったが敗れた。そこで孟達は成都の劉備に救援を求めた。諸葛孔明は救援に黄忠と嚴顔を向かわせることにした。

○表白堂本 卷十四「黄忠嚴顔雙建功」

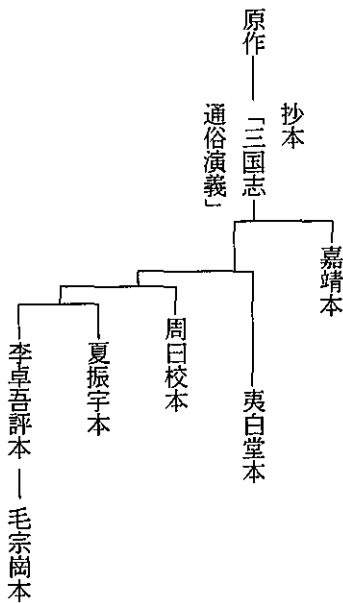
嘉靖本	周曰校本	夏振字本	夷白堂本
黄忠・嚴顔使兩個軍人、將兩把認旗於關口山上豎立。張郃聽知黄忠・嚴顔到來、心中暗笑。次日、引軍搦戰。	黄忠・嚴顔使兩個軍人、將兩把認旗於關口山上豎立。張郃聽知	黄忠・嚴顔使兩個軍人、將兩把認旗於關口山上豎立、使張郃聞知。	黄忠・嚴顔使兩個軍人、將兩把認旗於關口山上豎立。張郃聽知黄忠・嚴顔到來、心中暗笑。次日、引軍搦戰。
黄忠與嚴顔曰「你見諸人動靜、笑我奇功、以服衆心。」嚴顔曰「願聽將軍之命。」	黄忠・嚴顔曰「你見諸人動靜、笑我奇功、以服衆心。」嚴顔曰「願聽將軍之命。」	黄忠對嚴顔曰「你見諸人動靜、笑我等二人年老、可建奇功、以服衆心。」嚴顔曰「願聽將軍之命。」	黄忠與嚴顔曰「你見諸人動靜、笑我二人年老、必建奇功、以服衆心。」嚴顔曰「願聽將軍之命。」

周曰校本・夏振字本は卷七。この例において嘉靖本と周曰校本の文章を比較すると、周曰校本では嘉靖本に見られる「到来、心中暗笑。次日、引軍搦戰。黄忠与嚴顔曰、你見諸人」の二十二文字が脱落しており、文章が読めなくなっている。これはおそらく周曰校本における誤りであろう。続いて夏振字本を見ると、周曰校本のように嘉靖本にある何文字かが夏振字本にもない。しかし夏振字本では周曰校本よりは数文字多く、文章も読めなくなっていない。たとえば、夏振字本には「張郃聞(周曰校本は「聽」に作る)知」の後に「使」字があり、また周曰校本にはない「你見諸人」の四文字が夏振字本には見られる。これらは読めなくなっていた周曰校本のような文章を修訂した結果であるかもしれない。あるいは「你見諸人」は嘉靖本にも見られる文字であるので、周曰校本より古い形が夏振字本に伝わっているのかもしれない。いずれにせよ嘉靖本や周曰校本とはやや異なった文章になっている。そこで夷白堂本を見ると、若干の文字の異同はあるとはいえ、ほぼ嘉靖本の文章と一致する。つまり冒頭で述べた夷白堂本の刊行年についての推測が正しいとすれば、それに先んずる版本であるはずの周曰校本や夏振字本よりも古い形が残っているのである。これは以下のことながら傍証となろう。

夷白堂本は、本稿冒頭でも触れたとおり、おおよそ万曆

三十年代後半の刊行と推察される。一方周曰校本は、その封面に見える周曰校の識語によれば万曆十九年の刊行である。また、詳しくは次節で触れるように、夷白堂本はその他の版本には見られる挿入詩などが往々にして削られている。こうしたことから夷白堂本は周曰校本よりも遅れる版本であることに相違ない。にもかかわらず、先の例のように周曰校本よりもむしろ嘉靖本に近い、より古い形と思われるような文章も存在しているのである。したがって夷白堂本は周曰校本とは非常に密接な関係にあるけれども、周曰校本を底本にしてできた版本ではなく、周曰校本と夷白堂本に共通するある一つの底本からそれぞれの版本ができたと考えられるのである。

夷白堂本を含めて、『三國志演義』の二十四巻系諸本の系統図を示すと次のようになる。



四

前節までにおいて、夷白堂本の系統的な位置づけについて明らかにしたと思う。続いて本節ではそのことを踏まえた上で、夷白堂本を持つ特徴および『三國志演義』の版本変遷史上における問題点を考えてみたい。

夷白堂本を他の『三國志演義』諸本と比べたときに指摘できる特徴として、次の点が挙げられる。

まず夷白堂本では他の版本に見られる挿入詩が往々にして削られている。『三國志演義』を初めとして明代の長編小説では、ある一つの場面が終結すると、その場面を総括するような内容の詩やその場面で活躍した人物を讃える詩、あるいはその場面で死んだりひどい目にあつた人物を嘆く詩などが挿入される。また『三國志演義』など「講史」の万暦年間以降の版本では、「周靜軒」という人物の詠史詩が挿入されている（『三國志演義』の場合、周曰校本以降がそれに当たる）。ところが夷白堂本ではこれらの詩が削られていることが多い。夷白堂本に欠巻があるため正確な数を示すことはできないが、周曰校本のおおよそ三分の二の詩が夷白堂本には見られないのである。一例を挙げてみよう。場面は、諸葛孔明は六度目の祁山での戦いで司馬懿と対峙し、魏延に命じて司馬懿と司馬昭・司馬師の親子

を谷間で火攻めにし、将来謀反を起こすであろう魏延も一
緒に焼き殺してしまおうとした。¹⁰⁾

○周曰校本卷十一「孔明火燒木柵寨」

却説、孔明見魏延誘司馬懿入谷時、不勝忻喜。馬岱一
齊放火、將盡情燒死。忽天降大雨、火不能着。人報走了
司馬懿。孔明嘆曰、謀事在人、成事在天。後人有詩贊孔
明這八箇字曰、

烈火萬堆藏木柵、片時司馬命難全、忽然大雨霽茫茫、
謀事須人成在天。

又詩曰、

丞相安排烈火燒、霧港驟雨降青霄、孔明妙計如成就、
爭得山河屬晉朝。

周曰校本から引用したが、ここには「烈火万堆」の詩・
「丞相安排」の詩がある。そして周曰校本以外の版本も
同様である。しかし表白堂本では、本文に文字の異同は認
められないが、詩については「丞相安排」の詩がある（た
だし表白堂本では「丞相」の二文字を「孔明」に作ってい
る）だけである。このように表白堂本では周曰校本など他
の版本に比べて詩が少なくなっているのである。

次に表白堂本の特徴として、物語の展開に直接関わらな
い挿入された文章を削除している場合がある。たとえば、
諸葛孔明は第六回目の祁山への出陣中に兵糧の運搬のため

に「木牛流馬」なるものを発明し、それを作らせる。嘉靖
本や周曰校本を初め諸版本の文章中には「木牛流馬」の作
り方が詳しく記されている。諸葛孔明が「木牛流馬」を発
明したことは事実で、陳寿の『三国志』にも記され、裴松
之の注にはその作り方が『諸葛亮集』より引用されてい
る。¹¹⁾『三国志演義』はそこから挿入した（直接『三国志』
からかどうかは今はさておく）のである。ところが表白堂
本ではこの「木牛流馬」の作り方はいっさい削除されてい
る。

以上の二点はどちらも本来の『三国志演義』、あるいは
底本となったテキストの文章からあるまじく個所を削
除するというものである。このような削除を施すことに
よって当然本文全体は短くなる。すると書肆表白堂として
は、一つのテキストを刊行するに当たり、版木を彫る手間・
紙の費用が少なくて済むようになる。特に紙代の節約とい
う点に関しては、この他にも、巻末の最後の文章がちよう
ど一葉を数字程度越えそうなとき、行十七字の本来の版式
を崩して、その葉の終わり二、三行程度は一行の内に十七
文字以上の字数を収め、その巻の文章が次の新しい葉にま
でいかなないようにしていることがある。また改則の個所に
おいて、改則前の文が一行の上方で終わっていれば、次の
則の則題は改行せずに改則直前の文の後数字分あげたその

下に書かれることがある（一行節約することになる）。さらに本が小型であるということも、紙代の節約のためであるかもしれない。こうして夷白堂は自らの刊行する『三國志演義』の本の値段を下げようと努力したのであろう。

『三國志演義』諸版本の中で、文章を短くして本の価格を下げようとしたものとしては、二十卷「閑索」系諸本がある。この系統に属するテキストは、一部の挿入詩や物語の展開と直接関わらないままとまった記述を削除している他、本文そのものまで簡略な表現に書き改めているのである。ところが夷白堂本の本文は、第二節で詳しく見たように、二十四卷系諸本、中でも周曰校本の文章にきわめて近いのであって、「閑索」系諸本のように文章が簡略化されているのではない。つまり夷白堂本は挿入詩や挿入された文章を削除して全体の量を少なくしているが、本文そのものを短くしてはいないのである。もし書肆夷白堂が文章の簡略化・本の価格を下げることに積極的であったならば、本文が短い「閑索」系諸本の本文を採用したはずであろう。にもかかわらず「閑索」系諸本の本文ではなく、比較的長文の長い二十四卷系諸本の文章を採用したのはなぜだろうか。

ひとつの可能性として書肆夷白堂では「閑索」系諸本のテキストの存在を知っていたにも関わらず、あえて採用し

なかったのではないかということが考えられる。しかしもし夷白堂が「閑索」系諸本のテキストの一つでも見ていたならば、そして作品全体の文章を短くすることに積極的であったならば、二十四卷系諸本の文章よりもむしろ「閑索」系テキストの文章の方を採用していたであろう。にもかかわらず実際は「閑索」系諸本の文章ではなく二十四卷系諸本の文章を採用していることはすでに述べたとおりである。

そうであるとするると夷白堂は「閑索」系諸本のテキストを見ていなかったのではないかと考えられる。「閑索」系諸本は基本的に福建の建陽で刊行された版本である。一方の夷白堂本は杭州で刊行された版本である。また二十四卷系諸本に属する版本は基本的に南京で刊行されており、その中でも夷白堂本と文章が比較的近い周曰校本はまさしく南京での刊行である。これらの地理的關係を考えると、杭州の書肆である夷白堂が参照しやすいテキストは、建陽刊行のテキストよりも南京刊行のテキストであろう。このことから夷白堂は「閑索」系諸本に属する一テキストを見ずに、南京刊行の二十四卷系諸本の一テキストを見ていた可能性が高いと思われる。

夷白堂が『三國志演義』諸版本中文章の簡略化された「閑索」系諸本を見なかった、あるいは見ることができなかった

たのであれば、自ら刊行する『三国志演義』のテキストの分量を少なくしようとするのに、自らの手で本文を簡略化するということも考えられたはずである。しかし夷白堂本の本文は特別簡略化されているわけではない。それはなぜだろうか。

先に指摘した挿入詩・挿入文の削除についていえば、これら挿入詩・挿入文は通常の本文とは違って一字分下げて書かれている。しかも挿入詩・挿入文の始まるところでは改行が行われ、再び本文に戻るところでも改行される。よって長い本文中から挿入詩・挿入文を探し出すこと、そしてそれを削除することは比較的容易に行うことができる。しかもこれらを削除しようとも物語展開に特別影響を与えるものではない。それに対し自らの手で文章を簡略化するということは、本文そのものに手を入れることであり、物語の展開に直接影響を与えかねない行為である。文章の簡略の仕方が適切でないと、物語展開が変わってしまったり文意が通じなくなったりしかねない。挿入詩・挿入文の削除に比べてきわめて面倒な作業なのである。したがって夷白堂本の本文は周曰校本など二十四巻系諸本に比べて特別簡略化されてはいないのであろう。

夷白堂本には確かに紙代を節約しようとする姿勢が見て取れる。そのために本文を短くしようとしているのも事実

である。しかしそれはあくまで容易に行える範囲の挿入詩・挿入文の削除などに限られるのであって、特別難しいこと・面倒なことを行ってまでも本文を短くしようとはしていないのである。

五

夷白堂本の本文が二十四巻系諸本の中でも周曰校本に最も近いのであるが、段階としては夷白堂本は周曰校本に遅れるであろうということはすでに述べたとおりである。刊行年についても、嘉靖本は嘉靖元年、周曰校本は万曆十九年の刊行とされており、夷白堂本は万曆三十年代後半頃と推定された。これらことから、周曰校本と夷白堂本で現存最古の版本である嘉靖本に近いのは周曰校本の方のほうである。ところが巻数に着目すると、周曰校本が十二巻であるのに対し夷白堂本は二十四巻であって、二十四巻である嘉靖本に一致するのはむしろ夷白堂本の方である。これはどのように考えるべきなのであろうか。

第三節末に掲げた系統図を踏まえると、次の二つの可能性が考えられよう。一つは、抄本『三国志通俗演義』では十二巻であったが、嘉靖本ができる段階で一巻二十則を二つに分けて一巻十則とし、二十四巻となった。一方で各巻

二十則全十二巻の形は周曰校本へと受け継がれていったが、夷白堂本が成立するときに二十四巻になったということである。もう一つは、抄本「三國志通俗演義」の段階で各巻十則全二十四巻の形であり、嘉靖本はその形をそのまま受け継いだ。また周靜軒詩や十一の挿入説話が挿入された段階においてもまだ全二十四巻という形は変わらず、夷白堂本はそれを受け継いで成立した。一方周曰校本(あるいはそれにきわめて近い祖本の段階)が成立する段階で初めて二巻を一つにまとめて一巻二十則とし、全体を十二巻にしたということである。いずれの可能性であるかはいささか難しい問題であるが、おそらく後者の方ではないだろうか。

夷白堂本が刊行された万曆中期頃は十二巻本が広まっていた時期である。このころ刊行された十二巻本としては、周曰校本の他夏振宇本・鄭以楨本²⁷が知られる。このような時期にあって、夷白堂本があえて十二巻本を二十四巻にする必然性はさほどないのではないか。十二巻本を二十四巻本に、すなわち一巻二十則を二つに分けて一巻十則ずつにするのは、則数を正確に二等分したり新たに巻頭書名などをつけ加えたりする作業が伴い、二十四巻本を十二巻本にすることよりも面倒なことであろう。そもそも夷白堂本の特徴として、挿入詩や挿入文などを削っているが、本文を短くするような手間のかかる改訂は行っていないという点

が指摘できた。このことは巻数についても言えるのではないだろうか。つまり、夷白堂本が十二巻を二十四巻にするという面倒な作業の伴う巻数の変更を行うとは考えがたい。むしろ二十四巻本という古い形をそのまま伝えていくと考えた方がより自然なのではないだろうか。よって抄本「三國志通俗演義」は元々は二十四巻であり、嘉靖本や夷白堂本はその形をそのまま受け継いだ。二十四巻から十二巻に巻数が改められるのは、十一の挿入説話や周靜軒詩が挿入された後で、周曰校本そのものかあるいは周曰校本が直接基ついた底本(または周曰校本からきわめて近い祖本)の段階であろうと考えられるのである。

六

以上で夷白堂本の持つ特徴をおおよそ述べることができたとと思う。夷白堂本は、確かに二十四巻系諸本の系統に属する版本なのではあるが、その系統の中において他の版本とはやや異なった特徴を持っているのである。それは挿入詩や挿入文の省略であったり、あるいは古い二十四巻という形を保っているといったことである。そしてこれらの特徴から、夷白堂本が属する系統のより古い形が想定できるのであった。

第二節でも触れたように、『三國志演義』諸版本は大まかに三つの系統に分類できる。これら三つの系統にはそれぞれの特徴があり、さらにそれぞれの系統に属する版本にも、同じ系統に属する他の版本とはやや異なる特徴を持っている場合もある。本来は同じ一つの作品であるはずなのに、版本によって様々な相違が生じている。こうした版本間の様々な相違点が現れるには、それ相応の理由があるだろう。それにはまず出版経費を下げよう、あるいは顧客の目を引こうとする書肆側の思惑が考えられよう。そのため文章の簡略化や詩文の削除をして紙代などを節約したり、あるいは逆に民間の伝説などに基ついた新しい説話を挿入したりしたのであった。ところがその一方で、読者側にもそうした書肆側の思惑を受け入れるだけの素地が備わっていたはずである。だからこそ書肆側の思惑を反映した様々な版本が広まることのできたのであろう。そして版本間の相違点に着目することにより、明末期における白話小説の受容のされ方の一端が浮かび上がってくるのではないだろうか。

注

- (1) 江蘇広陵古籍出版社、一九八三年。
 (2) 『東洋文化』第七十一号、一九九〇年十一月。上田氏のこ

の論文には、夷白堂本の巻二十四第一葉表および巻二十一第一葉表の写真を掲載する。

- (3) 東方書店、一九九三年十月。(東方選書25)
 (4) 十一の挿入説話の具体的な内容については、中川論『三國演義』版本の研究―毛宗崗本の成立過程―(『集刊東洋学』第六十一号、一九八九年五月)参照。
 (5) 『三國志通俗演義』二十四卷。上海圖書館他蔵。
 (6) 『新刊校正古本大字音釈三國志通俗演義』十二卷、北京大學圖書館・内閣文庫・蓬左文庫・宮城県圖書館伊達文庫(巻九、十二)蔵。
 (7) 『新刻校正古本大字音釈三國志通俗演義』十二卷、蓬左文庫蔵。
 (8) 『李卓吾先生批評三國志』百二十回。吳観明刊本(蓬左文庫他蔵)・緑蔭堂本(京都大学人文科学研究所蔵)・黎光樓刊本(上海圖書館蔵)などがある。
 (9) 注(3)前掲拙論。なお筆者はこれまでこの系統を「十二卷系諸本」と呼んできたが、後述するようにこの系統は元は二十四卷で後に十二卷になったと考えられる。よってここで「二十四卷系諸本」と呼ぶことに改めたい。なお周曰校本と夏振宇本との関係について、上田望氏は注(1)前掲論文でどちらかがどちらかに先行するものではなく、両者は横並びの関係であると述べている。この点については筆者も異論はない。
 (10) 中川論『三國志演義』版本の研究―建陽刊「花間索」系諸本の相互関係―(『日本中国学会報』第四十四集 一九九二年十月)。
 (11) 中川論『三國志演義』版本の研究―「閑索」系諸本の相互

- 関係一」（『集刊東洋学』第六十九号、一九九三年五月）。
- (12) 『新録京本校正通俗演義按鑑三國志伝』二十卷 内閣文庫・蓬左文庫蔵。
- (13) 『新刻音釈旁訓評林演義三國志史伝』二十卷、ハーバード大学・大英博物館蔵。
- (14) この例は注(4)前掲拙論で、嘉靖本↓周曰校本↓貝觀明本↓毛宗崗本という段階を指摘するのに用いたのと同じ場面である。
- (15) 注(4)前掲拙論。なお注(4)前掲拙論では夏振字本を取り上げていないが、ここに示したように夏振字本の該当箇所を見ると、嘉靖本↓周曰校本↓夏振字本という段階を指摘することができる。ただし周曰校本を底本にして夏振字本ができたのではない。この点については注(1)前掲上田論文参照。
- (16) このように夏振字本の中にはまれに古い文字・語句が見られることがある。注(2)前掲上田論文参照。
- (17) 周靜軒、名は礼。おおよそ弘治から嘉靖年間にかけて杭州に隠居し著述をしていた人物である。『杭州府志』・『余杭県志』に伝記がある。劉修業『古典小説戯曲叢考』(一九五八年、作家出版社)所収『新刻按鑑演義全像批評三國志伝』二十卷)参照。
- (18) 魏延には「反骨」があり、将来蜀の国に対して謀反を起こすであろう人物として描かれている。なお明代の小説における登場人物の人物については、小川陽一『三國志演義』の人間表現―相書との関係において―(金谷治編『中国における人間性の探求』創文社、一九八三年)および、同『明代小説における相法―三國志演義と金瓶梅を中心に―』(『東方学』第七六輯、一九八八年)参照。また毛宗崗本では、諸葛孔明が魏延を焼き殺すのは不合理だとし、この部分を修訂している。
- (19) ただし諸葛孔明が「木牛流馬」をいつ發明したかについては、『三國志』本文・注ともに記載はなくわからない。これを祁山の戦いに持ってきたのは、『三國志演義』のフィクションである。
- (20) 中川諭『明代長編小説における「文繁本」と「文簡本」および「三國志演義」諸本三系統の関わり』(『東北大学文学部研究年報』第四十四号、一九九五年三月)参照。
- (21) 金文京氏はこの系統を「南京系」とも呼んでいる。注(3)前掲金氏の著作参照。ただし時代が下がり崇禎年間頃になると、たとえば貝觀明本のように、福建建陽で刊行されながら「南京系」の文章をしているテキストも現れる。
- (22) たとえば二十卷「花関索」系諸本の内の一つ「新刻湯学士校正按鑑演義全像通俗三國志伝」二十卷(湯賓尹本)はその他の同系統の諸本と比べて本文が些か簡略になっている。しかし「関索」系諸本の本文とは一線を画し、やはり「花関索」系諸本の系統に属するような本文なのである。注(10)前掲拙論参照。
- (23) こうした挿入詩・挿入文と違って「関索物語」などの挿入説話は完全に本文の中にとけ込んでいるため、容易に取り出すことのできるものではない。
- (24) 『新編校正京本大字音釈圈点三國志演義』十二卷。孫楷第『中国通俗小説書目』著録。商務印書館旧蔵。この本は現在では行方不明である。おそらく先の戦争で焼失してしまったのであろう。